音楽文化教育学研究紀要　No.34　2022.3.23

音楽科教員養成課程における声楽のグループレッスン指導

―学生による授業記録を中心に―

大野内　　愛
（広島大学大学院人間社会科学研究科）
枝　川　一　也
（広島大学大学院人間社会科学研究科）

Group Lesson Teaching of Vocal Music in the Music Teacher Training Program:
With a focus on Class Records by Students

Ai OONOUCHI
Kazuya EDAGAWA

Abstract
This study clarifies the content of learning from the students' point of view based on the descriptions of the class records of the vocal music classes we teach, and to obtain suggestions for the future of vocal music classes. The method used in the research is to analyze the descriptions of the class records submitted by the students after the lessons. For the analysis, we use the User Local text mining tool. By looking at the frequent words and co-occurrence relations in the text data, the content of learning from the students' point of view will be clarified. The analysis revealed the following learning processes: (1) German pronunciation, (2) expression based on reading the atmosphere from the score, and (3) vocal approach to achieve the desired expression. Furthermore, these learning processes were deepened through the form of group lessons. It is very effective for the students of the teacher training course to read the music score and learn the vocal approach for the desired expression. In future, it would be desirable for vocal music classes to start with a musical approach and then expand to vocal instruction, rather than placing too much emphasis on vocal instruction.

1. 研究の背景と目的

音楽科の教員養成課程においては，音楽科教育を実施するために必要な教育に関する基礎的な知識，技能を，理論だけでなく，実技，実習などから習得していくための授業が準備されている。演奏家を養成する音楽大学とは異なり，学習内容は多岐にわたる。その中で，通常は個人レッスンを基本とする実技系の科目において，授業時間の都合上，グループレッスンの形式で実施することも少なくない。こうした状況下で，学生は 1 つ 1 つの授業内容をどのように理解し，技能を習得しているのだろうか。

筆者らは広島大学教育学部第四類音楽文化系コース（以下，本コース）で声楽の授業を担当している。1 年生の必修科目として設定している「声楽基礎研究Ⅰ・Ⅱ」の授業では，学年全員が履修するため，設定された授業時間では学生 1 人につき 15 分程度しかレッスンを実施することができない。したがって筆者らは，声楽の授業を個人レッスンではなくグループレッスンの形態で行うことにしている。

グループレッスンは，特に保育士養成課程や初等教育の教員養成課程における音楽の実技指導で多く用

いられているが，音楽を専門とする中等教育の教員養成課程では，それほど多くは報告されていない。その中でも近年では我が国において，倉戸（2019）が宮城教育大学の中等教育教員養成課程で音楽を専門とする学生を対象としたピアノ演奏実技指導の授業について報告している。その中でグループレッスンの意義として「第一に，自分が演奏しない曲についても知ることができる」「第二に，クラスメイトの演奏を毎回聴くことにより，客観的に演奏の善し悪しを判断できる聴く力を育てられる」「第三に，毎回の授業でクラスメイトの前で演奏し（中略），緊張した状態での演奏経験（本番）を多く積むことが出来る」（p.264）と結論づけている。また，狩野（2017）は，島根大学教育学部の中等教育教員養成課程で声楽を専門としない音楽教育専攻学生に対するグループレッスンについて報告しており，音楽実技指導では一般的には非効率とされるグループレッスンでも「ペア学習やピアレビューの視点を導入することで，逆にその学習環境ならではの利点を活用することもできた」（p.175）と述べている。また，海外の音楽大学でのグループレッスンについては，野呂ら（2016）により報告されており，グループレッスンのメリットとして「学生に不足している点や勉強方法を，演奏している学生をモデルとして客観的に知ることができる。教師の指導によって演奏内容が変化していく様子を見ることで，指導のポイントを知る機会になる。他者との比較で自分の演奏を見つめ直すことや，勉強したことのない作品の内容や演奏方法等も学習でき，普段自分が受けているレッスンと合わせることで，多くのことの理解を深め，整理できる機会となっている」（p.331）と述べている。

これらの先行研究は，グループレッスンの意義は明示されているものの，学習者である学生の立場から考察されたものではない。したがって本稿では，筆者らが担当している声楽の授業での学生による授業記録の記述をもとに，学生の視点から学びの内容を明らかにすることにより，今後の声楽の授業のあり方への示唆を得たい。

2. 対象とする授業の概要

本稿では，2021 年度 2 セメスター（第 3 ターム[1)]）に開講された専門必修科目「声楽基礎研究Ⅱ」を対象とする。1 セメスター（第 1 ターム）に開講されている「声楽基礎研究Ⅰ」では，コンコーネ 50 番練習曲とイタリア古典歌曲集を中心にレッスンをしており，続いて 2 セメスターに開講される「声楽基礎研究Ⅱ」では，主にドイツ歌曲を扱うことになっている。F. シューベルト作曲の歌曲を中心とし，歴史的背景や音楽的な特徴を捉えながら，声楽発声の基礎的な理論と技術の習得を目指した授業である。

授業形態は，グループレッスンである。学生が 1 名ずつ自分で選択したドイツ歌曲のレッスンを受け，その様子を他の履修者が見学する。ピアノ伴奏も履修者が行う。授業者は必要に応じて見学している履修者に問いかけたり，クラス全体で歌唱させたりする。

履修者は，本コース 1 年生全員と，初等教員養成課程に所属する学生のうち音楽科の教員免許状の取得を希望している 2 年生 3 名の，合計 25 名であった。うち，声楽を専門とする学生 2 名も一緒に授業を受けている。履修者の中には，第二外国語としてドイツ語を履修している場合もあるが，約 3 分の 1 の履修者はドイツ語に触れるのは初めてであり，全 15 回の授業の内，数回はドイツ語の読み方に関するレクチャーを実施している。最後の試験では，自分で選択した 1 曲を全員の前で暗譜で歌う。

学生は授業までにワークシートの前半部分に，曲名，作詞者，作曲者，曲について調べたことを記入し，レッスン時に授業者に渡す。授業者はワークシートに書かれた内容を踏まえて，学生と対話をしながらレッスンを実施する。授業後，授業者はワークシートを学生に返却し，学生はワークシートの後半部分に感想や課題などを自由に記入して，再度，授業者に提出する。

3. 学生の記述内容の分析

3-1. 分析方法

毎回の授業で学生から提出されるワークシートの後半部分，つまり学生が授業後に感想や自分の課題など記入した部分を分析の対象とする。レッスンを伴う授業は全部で 5 回[2)] 実施されたため 1 回目から 5 回目までの 5 回分のワークシートが対象となる。ワークシートの後半部分に学生が自由に記述したテキスト

データを，UserLocal 社のテキストマイニングツールを用いて分析する。そこから頻出語や共起関係をみることで，学生の視点からの学びの内容を明らかにする。

3-2. 品詞別の頻出語

3-2-1. 名詞

名詞の頻出上位 10 語を右に示す（表 1）。なお，10 語目と同じだけ頻出した語も併せて示す。

表 1 を見ると，5 回全てで頻出語となったのは「表現」のみであり，次いで 4 回頻出語となったのは「曲」「意識」「声」「母音」であった。ドイツ歌曲で表現をするということ，意識すべきこと，適切な声，母音をつなげて歌うことなど，これらは授業を通して学生が意識をしている内容であると言える。

特に前半に頻出するのが，「ドイツ語」「歌」「発音」「流れ」「息」「拍」「レッスン」である。学生の中には，第二外国語としてドイツ語を履修している者もいるが，ドイツ語の歌曲を歌うのは，ほとんどの学生が初めての体験であった。そのためドイツ語の発音の難しさや戸惑いが生じ，「ドイツ語」「発音」という単語が前半に頻出したと考えられる。また，ドイツ語の発音に必死になるほど，息が流れなくなり，歌としてなめらかな旋律を作り出すことができなくなることが多いため，授業者は発音の指導と同時に，息を流れを大切にするよう指導している。そのため「息」「流れ」が頻出していると考えられる。

中間に頻出しているのは，「ピアノ」「強弱」「ブレス」「音域」「音符」「楽譜」「感情」「雰囲気」「言葉」である。楽譜から音符や言葉や強弱をよく見て，感情や雰囲気を捉える，という学生の姿が想起される。

後半に頻出しているのは「下」「発声」「フレーズ」「イメージ」「伴奏」「テンポ」である。曲をイメージしてテンポを考え，フレーズを歌っていくために発声を意識することなどが，学生にとってのポイントとなっていることがわかる。

表 1　名詞の頻出上位 10 語

単語	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目
ドイツ語	●				
表現	●	●	●	●	●
曲	●	●	●		●
意識	●	●	●	●	
歌	●	●			
音	●			●	●
発音	●	●			
歌詞	●				●
声	●	●	●	●	
ピアノ	●		●	●	
流れ	●				
練習		●			●
息		●			
音楽		●	●		●
母音		●	●	●	●
拍		●			
強弱		●	●		
ブレス		●	●	●	
レッスン		●			
大切		●	●		
音域			●		
音符			●		
楽譜			●		
感情			●		
雰囲気			●		
言葉			●		
下				●	
発声				●	
フレーズ				●	●
イメージ				●	●
伴奏					●
テンポ					●

3-2-2. 動詞

動詞の頻出上位 10 語を右に示す（表 2）。なお，10 語目と同じだけ頻出した語も併せて示す。

表 2 を見ると，5 回全てで頻出語となっている「思う」「いく」「できる」「つける」「考える」は，文末に多用される動詞であり，学生の学びの内容と直接的に関係しない。そのほか，全体を通して頻出している「歌う」「感じる」は，感情を使って歌っていこうとする学生の姿が想起される。

次に，時期で偏りのある動詞を見ていく。

前半に頻出している動詞は「いける」「すぎる」「読む」「入れる」「響かせる」「合う」であり，ドイツ語を読む

表 2　動詞の頻出上位 10 語

単語	1 回目	2 回目	3 回目	4 回目	5 回目
思う	●	●	●	●	●
歌う	●	●	●	●	●
感じる	●	●	●		●
いく	●	●	●	●	●
できる	●	●	●	●	●
つける	●	●	●	●	●
しまう	●	●	●	●	
いける	●				
すぎる	●				
歌える	●	●			●
取る	●		●	●	
読む	●				

こと，ドイツ語の母音を拍頭に合わせて響かせることなどにポイントを置いていることが想像される。

中間部に頻出しているのは「もつ」「進む」「変える」「活かす」「知る」「頑張る」であり，音楽を進めること，曲想に合わせて雰囲気を変えること，他の曲にも活かしていくことなどに着目している様子がみられる。

後半に頻出している動詞は「出せる」「合わせる」「聴く」「作る」である。ここには最後の試験に向けて，ピアノ伴奏とお互いによく聴き合い，合わせて，音楽を作っていこうとする姿がある。

出す	●			●	●
入れる	●				
考える	●	●	●	●	●
響かせる		●			
もつ		●	●		
合う		●			
進む			●		
変える			●		
活かす			●		
知る			●		
頑張る			●		
出せる				●	
合わせる					●
聴く					●
作る					●

3-2-3. 形容詞

形容詞は数が少ないため，複数（2 回以上）使用された単語を頻出語として挙げ，分析した。その結果，全体を通して「良い」「美しい」「深い」「難しい」「うまい」などが頻出していたが，特に時期によっての著しい偏りは見られなかった。

3-3. 共起関係

1 回目から 4 回目まで各回の共起関係で特に強いものを以下（図 1～4）に示す。

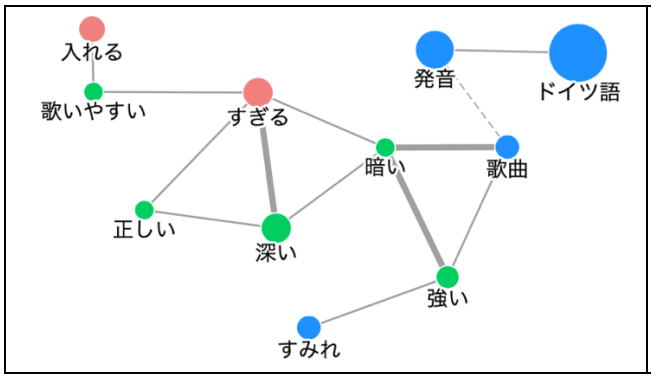

図１　１回目のテキストによる共起関係

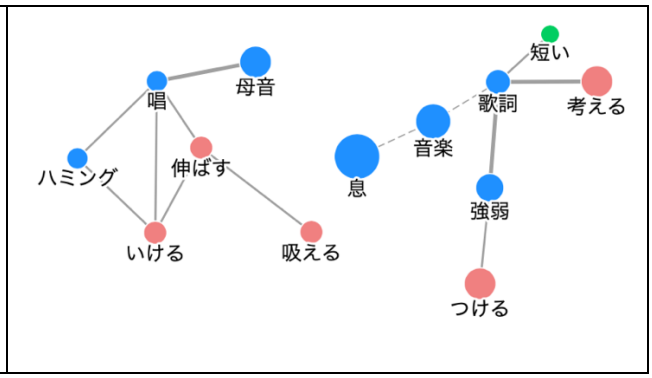

図２　２回目のテキストによる共起関係

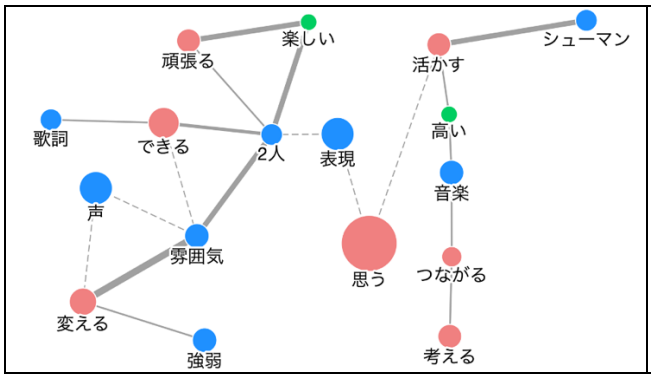

図３　３回目のテキストによる共起関係

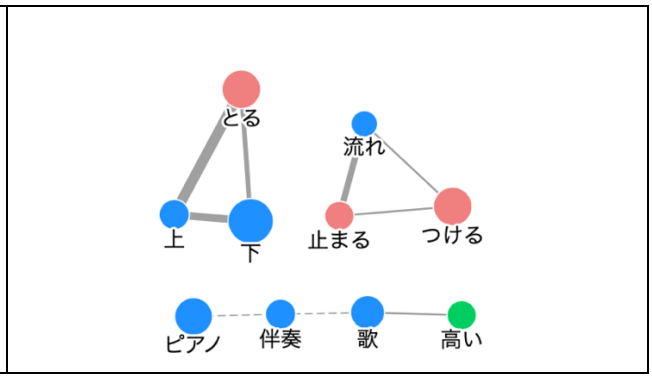

図４　４回目のテキストによる共起関係

まず，図 1 を見ると，1 回目の授業後は，「ドイツ語」「発音」とそれに関連して「歌曲」「暗い」「強い」などが強く共起していた。これらがどのような文脈で使用されていたかを見ると「次はドイツ語の発音をもっとよくしたい」「どうしても自分の中でドイツ歌曲は，イタリア歌曲や日本歌曲に比べて発音が深いところで行われるイメージが強くあって，必要以上に響きを暗く，深くとりすぎる傾向があるように思う。でも，楽譜の音符とドイツ語の正しい発音と持続的な息の流れがあれば，故意に深くしすぎる必要はない

とも改めて感じた」などであった。ドイツ語の発音に関しては，これまでに学んだイタリア語の発音に比べ，母音を少し暗く深く作っていく必要があることを事前レクチャーの時間に伝えていたことも影響していると考えられる。

図 2 では，それほど強い共起は見られなかったが，「母音」「唱」「伸ばす」「ハミング」「いける」「吸える」に共起関係があった。使用されていた文脈としては，「自分の良いところを伸ばしていけるよう，母音唱で透き通った感じに歌いたい」「ハミングの位置にもっていけるように，練習を重ねていこうと思う」「次回は表現と共に，深いところから歌うことを目指し，ハミングと母音唱で響きを感じて練習する」などであった。

図 3 では，まず「2 人」「楽しい」「頑張る」「雰囲気」「変える」などに共起関係があった。文脈としては，「男女 2 人がもう死んでいるのか，眠っているのかわからないが，2 人の穏やかで楽しい雰囲気を表現できるように頑張りたいと思った」「同じ歌詞を繰り返すところで，曲が短調になるので，2 人の関係性をミステリアスに表現できるよう，*pp* の中でも声を前に飛ばして雰囲気を変えたい」などであり，扱っている歌曲の歌詞の内容の理解を深め，演奏につなげる部分であった。

図 4 では，まず「上」「下」「とる」に強い共起関係があった。どのような文脈かを見ると「発声を下からとってしまっているため上からとるイメージ」「音を上からとるか下からとるかで，聞く側に与える印象がすごく変わるのだと思った」などであった。そして「流れ」「止まる」「つける」の共起関係については，「伴奏も歌も，流れが止まって落ち着いてしまいがちなので，気をつける」「4 分の 2 拍子だということを忘れず，流れが止まらないように気をつける」などの文脈で使用されていた。また「ピアノ」「伴奏」「歌」「高い」の共起関係は「ピアノの伴奏形からも読みとることが多くあると分かった。(歌の自由度が高いかどうかなど)」という文脈であった。

なお，5 回目の授業後のテキストデータからは，強い共起関係は見られなかった。

4. 学生の視点でみる学びの内容

授業後に学生が書いたワークシートのテキストデータを分析した結果，大きく分けて，「①ドイツ語の発音」「②楽譜から雰囲気を読み取った上での表現」「③求める表現のための発声のアプローチ」という学びの過程が見えてきた。

まず初めの段階では，学生は「①ドイツ語の発音」に意識が集中していたようである。これは前述のとおり，第二外国語でドイツ語を学習している学生も含め，慣れない言語を用いての歌唱となるためであろう。さらに筆者らは声楽の授業の中で，ドイツ語の発音について舞台ドイツ語（Bühnendeutsch）にも触れているため，学生が第二外国語の授業で触れている発音と異なる部分もあり，困惑しているようである。

そして次の段階では「②楽譜から雰囲気を読み取った上での表現」へと意識が向くようになる。ドイツ語を読むことで精一杯だった段階から脱出し，通常の演奏と同じように楽譜から内容を読み取り，表現しようとしていくのである。器楽曲と比較すると，声楽曲には歌詞があり，物語や感情など伝えたいことが言葉として表されているため，より具体化した表現が可能となる。

最後に学生は「③求める表現のための発声のアプローチ」を考えていくようになる。②で自分がどのように表現したいのかがある程度明確になると，次はそれをどのように実現していくかが課題となる。高い声を美しく出したい，強い声を出したい，悲しい雰囲気を声で作りたい，などの思いが芽生え，発声方法に意識が向くのであろう。

これらの学びは，グループレッスンにより深まっている。その根拠として，テキストデータには「息継ぎのタイミングを工夫して，歌いやすくすることも必要。他の人のレッスンを見て，息の吸い方を私も気をつけようと思った」との記述がある。この学生は，客観的に他者のレッスンを見ることにより，自分の歌に活かせることを見つけている。さらに「悲しさを表現するときに，1 人 1 人に合った表現というものがあるのだとわかった。〇〇さんと私の歌い方は違うから，私が悲しさをこの曲の中で表現するときは，美しさを求めていくことが大切だと思った」というものがある。これは，グループレッスンの中で 2 名が偶然同じ曲を選択しており，同じ曲でレッスンを受ける他者の姿を見た感想である。どのように表現していくかを考える段階において，同じ曲の中で異なるアドバイスを受ける他者を見て，自分の独自性に気づ

くこともある。

限られた授業時間の中，1 人 1 人へのレッスン時間を充分に確保することは困難であった。しかし，グループレッスンの形態をとることにより，学生の学びを深めることができたといえる。

5. 今後の声楽の授業のあり方への示唆

筆者らは「声楽基礎研究Ⅱ」の 1 回目の授業において，ドイツ語の発音について，ドイツ歌曲について，時代背景について，ピアノの発達について説明をするだけでなく，前期の復習として発声の基礎を指導した。シラバスにも授業の目的として「声楽発声の基礎的な理論と技術の習得を目指す」と記している。しかし，実際に学生が発声について意識したのは，授業の後半であった。つまり，扱う曲の内容や感情を想像し，それを音楽でどのように表現したいか考えた上で，必要に駆られて発声を学んでいるのである。これは筆者ら授業者にとって，理想的な流れと言える。なぜなら声楽は，単に良い呼吸をし，良い声を出すことができれば終わりではなく，呼吸や声は音楽で表現するための手段でしかないからだ。楽譜を読み，想像し，表現について考えることは，声楽以外の演奏にも活かされることだろう。声楽の授業での学びがピアノや管弦打楽器のなど他の学びつながっていくことは，幅広い演奏技能を必要とする教員養成課程の学生にとって非常に有効である。

以上のことから，今後，グループレッスンでの声楽の授業においては，発声指導偏重になることなく，音楽的なアプローチから進め，そこから発声指導へと展開していくことが望ましいと言える。特にグループレッスンでは，実際にレッスンを受けるのは 1 人の学生であっても，授業者はその周りで聴いている学生にも向けて授業をすることになる。すると，レッスンの対象学生 1 人への発声指導よりも，音楽表現についての指導の方が汎用性が高いのである。声楽を専門としない学生が多くを占める授業の中で，歌を歌うことにコンプレックスをもつ学生は少なくない。そうした学生にとっても，苦手な発声からのアプローチより，音楽表現からのアプローチの方が，より歌うことへの意欲が高まるのではないだろうか。

6. 本研究の課題

本稿での調査の結果は，筆者ら授業者の音楽教育観による影響が大きく出ている。また，グループレッスンではないマンツーマンの指導でのデータと比較したものではなく，グループレッスンだからこそ得られたこととは言えない点も課題としてあげられる。さらにグループレッスンの意義は先行研究からも明らかである一方，マンツーマンでのレッスンにより，学生が人目を気にせず声を出すことができたり，授業者と学生がより内面を曝け出し，詞の内容を語り合ったりすることもできる。今後，マンツーマンとグループレッスンでの意義を比較しながら，より効果的な指導方法を考えていく必要がある。

注

1）本学ではターム制を採用している。
2）ターム制のため，1 回 2 コマ分の授業が実施されている。

引用・参考文献

狩野麻実（2017）「教員養成課程における副科学生を対象とした声楽指導法試論（1）－グループ・レッスンの形態による－」『島根大学教育臨床総合研究』16 巻，pp.167-176

倉戸テル (2019)「教員養成学部の授業としてのピアノ実技指導－その現状と課題－」『宮城教育大学紀要』54 巻，pp.259-266

野呂佳生・松永加也子・水田香・寺田貴雄（2016）「ヴュルツブルク音楽大学におけるピアノ指導法－Inge Rosar 教授のグループレッスン及び実践演習より－」『北海道教育大学紀要 教育科学編』67 巻，1 号，pp.321-333